

タイトル:「たちどまって考える」(全245ページ)

出版社:中央公論新社

発行:2020年9月10日



著者紹介:ヤマザキマリ

1967年東京生まれ。漫画家・文筆家。東京造形大学客員教授。84年にイタリアに渡り、フィレンツェの国立アカデミア美術学院で美術史・油絵を専攻。2010年『テルマエ・ロマエ』(エンターブレイン)で第3回マンガ大賞受賞、第14回手塚治虫文化賞短編賞受賞。15年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。17年イタリア共和国星勲章受章。

内容:パンデミックを前に動きを止めた社会。世界を駆ける漫画家・ヤマザキマリもこれほど長期間家に閉じこもり、自分や社会と向き合ったのは初めてだった。しかしその結果「たちどまることが実は必要だったのかもしれない」という想いにたどり着く。ペストからルネサンスが開花したようにまた何かが生まれる?混沌とした日々を生き抜くのに必要なものとは?自分の頭で考え、自分の足でボーダーを超えて。あなただけの人生を進め!・・・**主要ポイント:5点(↓)**

主要ポイント

(1)「開かれた民主主義に必要なのは、政治的決断を透明にして説明することと、その行動の根拠を伝え、理解を得ようとすることです」(P43)。日本では、政治家のみならず、決断を下すべき立場の人たちが責任から逃げよう、逃げようとしているのが今の風潮にも思えます。(P45)

(2)日本の特別定額給付金の決定するまでの紆余曲折のように、物事が進む速度が明らかに遅かった。こうした危機下における政府の判断と行動力も、今回のパンデミックを通して、あらためて見えたことでした。(P55) 日本は150年前に民主主義というシステムを取り入れ、経済重視で回していくことが先進国だと信奉してきた。同じパンデミックという問題を前にして、欧州との判断の差異が出るのは当然のことなのだと感じています。(P57)

(3) 自粛期間は旅の代わりに、今まで以上に本を読んだり映画を見たり、考え事をすることに時間を費やすことで、それなりの充足感を得られています。加えて、「自分の考えを自分の言葉で言語化する」という技がいつにも増して鍛えられていく。こんなことも、今みたいな状況でなければなかなかできないことだと思います。(P118) 人間にとって最終的に頼りになるのは、自分自身以外にありません。このパンデミックには、自分を逞しくする、いいきっかけを与えてくれるそんなポジティブな側面もあるのではないのでしょうか。(P122)

(4) 例えば、「アベノマスク」や「Go to トラベル」に費やされる費用など、道理はわかっても、なんだか納得のいかない政策や提案が実施されました。その納得のいかなさの要因を、ネットやテレビで誰かが発信している言葉ではなく、自分の考えのなかから見つけてはどうでしょうか。それ次第でパンデミック後の私たちの生活、社会の変化の質は大きく変わってくるはずですよ。(P220) 日本とは違う土壌や歴史で形成されてきた西洋式の社会から学ぶことは多く、そこに気がついた明治の人たちが行った改革は画期的でした。ですが、受け入れられる部分と馴染まない部分があることへの考慮もそろそろ必要です。随分と時間が経ちましたが、違和感を覚えれば何がその要因なのか、体質に合っていない部分を見つけて考え直し、メンテナンスをしなければなりません。(P221)

(5) もとより私たち人類は、この地球から選ばれた、特別な生き物というわけでも何でもありません。私たちが今ここでたちどまった意味とは、パンデミックという状況下でヒトという社会性をもった生き物がそもそも何なのか、危機が自分たちの社会に迫ったとき、どのような反応をする生き物なのか、今までと違う角度から見直すことにあるのではないのでしょうか。(P244) 社会という群れのなかでなければ生きられず、知恵の発達した生き物としての傲りで膨れ上がってきた人類。パンデミックは、そんな我々にいったんたちどまって学習する機会を与えてくれたのだと、私は捉えています。(P245)

☆番外編:パンデミックのなかなど、疲れた心に笑いは必要です。最良の笑いのネタは「恥辱」ではないのでしょうか。「リコーダー タイタニック」で検索すると直ぐに出てくる動画は、お勧めです。アップされてから相当長く世に出回っているのですが、見ると死ぬほど笑い転げます。これはニュージーランド人の動画で、「街を見下す高台」「波止場」「キャンドルライトに照らされた食卓」など、様々な美しいロケーションでドラマティックなポーズを決め、リコーダーでものすごく下手な「タイタニック」のテーマ曲を演奏するものです。(P159)

【目次】

はじめに

○2020年2月、仕事でミラノを訪れた私は、主人のいる隣の州に行くことができず、そのまま東京に戻った。(P4)

○同年3月、イタリア全土でロックダウンが実施された。(P5)

○何百年に1度ぐらいの頻度でしか起きない世界規模のパンデミックの時代に、我々は生きている。(P6)

第1章 たちどまった私と見えてきた世界

命さえあれば

○中国に続いて感染爆発が起きたイタリアでは、「命さえあれば復興はできる。歴史もそれを証明している」との解釈が通じる。(P17)

○日本人の倫理観は、「社会」と「世間体」との関係で、「こういうことをするとダメらしい」から来るのでは。それがパンデミックでの自死に繋がる。(P18)

家族たちと離れ離れになって

○家庭内(DVの増加など)のみならず、社会において、水面下にあった問題が顕在化する現象が、今回のパンデミックにあります。(P20)

パスタかトイレトペーパーか

イタリア家族たちからの疑念

日本人のメンタルバリケード

人との距離の近いイタリア、遠い日本

○イタリア、ブラジル、アメリカでの感染率の高さを見るにつけ、人との接触率や会話率が高いところほど、感染が拡大しやすいのではないかと。(P31)

○他に、マスクの習慣、こまめな手洗いの習慣などがあげられるのでは。(P32)

暮らして見えたイタリアと中国の蜜月

○濃厚接触はイタリアだけではないのに、なぜイタリア北部で中国に次いで感染爆発が起きたかは、イタリアと中国の蜜月によるもの。(P34)

パンデミックが比較して見せたリーダーの姿

○パンデミックが比較して見せたリーダーの姿、世界が同じ一つの問題に同じタイミングで向き合っているのを、リアルタイムで見つめる機会もそうはありません。(P41)

「弁証力」というヨーロッパの教養

○今回のパンデミックに際し、ヨーロッパのリーダーに見られるように民衆の心に届く演説ができる政治家は、現在の日本にはいないのではないのでしょうか(アベノマスクの時)。(P42)

○「開かれた民主主義に必要なのは、政治的決断を透明にして説明することと、その行動の根拠を伝え、理解を得ようとする事です」。(P43)

言葉の力は「熟考」がもたらす

○日本では、政治家のみならず、決断を下すべき立場の人たちが責任から逃げよう、逃げようとしているのが今の風潮にも思えます。(P45)

ドイツが打ち出した「芸術支援」のメッセージ

○パンデミックのもとでも文化芸術を衰退させないというドイツの政策は、人間社会における文化芸術の役割を理解しているものだと思います。(P50)

「不要不急」に象徴される日本の曖昧さ

○「不要不急」「東京アラート」のように、日本の社会は政府も含めて「組織の側が責任を持ちたくないなんだな」とあらためて確認する思いです。しかし、それは日本人の持つピュアな天真爛漫さゆえのものでもあります。(P50-53)

○パンデミックでは、為政者にははっきりと現実を伝えてもらったほうが、私たちの緊張感が高まりますし、自己責任という意識も強くなります。(P54)

「とにかく経済より人の命ですから」の成熟

○日本の特別定額給付金の決定するまでの紆余曲折のように、物事が進む速度が明らかに遅かった。こうした危機下における政府の判断と行動力も、今回のパンデミックを通して、あらためて見えたことでした。(P55)

○日本は150年前に民主主義というシステムを取り入れ、経済重視で回していくことが先進国だと信奉してきた。同じパンデミックという問題を前にして、欧州との判断の差異が出るのは当然のことなのだと感じています。(P57)

○パンデミックという時代を生きることになった私たちは、少したちどまって、これまで見過ごしてきた物事を落ち着いて考え、またじっくりと、それまでとは違った角度から見つめ直す。そんなタイミングではないかと思っています。(P57)

第2章 パンデミックとイタリアの事情

なぜイタリア人はマスクを嫌うのか

○イタリア人にとってマスクは今や「自分たちの自由な判断では生きられなくなった」というパンデミックの状況を、端的に形象するものになっているのです。(P64)

ソーシャルディスタンスが日本の半分?

○至近距離でのコミュニケーションをそのまま貫いて、それでも生き延びた人たちが、ウイルスと共生しながら生きていくことになるのかもしれませんが。要するに、ウイルスによる人類の淘汰が起きる。ほかの生物の生態を踏まえても、それこそがウイルスの本質的な目的なのではないかという気がしてならないのです。(P67)

ローマ帝国を滅ぼした疫病の記憶

西洋美術のなかの「死の舞踏」

暗黒の中世とルネサンスの種火

○中世ヨーロッパの暗黒の時代のなかでエネルギーを充填し、育まれたものが、ルネサンスへと繋がっていくことになり、芳醇な文化を花開かせるに至ったわけです。私は今回のパンデミックでも、未来につながる何かが育っているのではないかと考えています。(P74)

古代ローマ史並みの、家族のドラマ

「生き残ってきた DNA」という自信

○イタリア人は「生き残った DNA」という自信がある。(P80)

中国への本音、キューバとのつながり

○イタリアは「中国を今失えば、自分たちは野垂れ死にするかもしれない」といったくらいの自覚を持っています。(P83)

医療崩壊と自問自答

○イタリア政府は深刻な財政難に陥り、医療費の削減を積極的に行い、その結果今回のパンデミックによって、医療崩壊を起こしました。(P87)

「バールごっこ」と「誰も寝てはならぬ」

○イタリアでは、厳格なロックダウン下では、動画や SNS などに劇や音楽が多数投稿された。(P91)

弁証力を育む学びのシステム

○イタリアや欧州の国では、紙に書いた原稿に目を向けながらでないと発言できない人は、一国のリーダーに選ばれることなどないでしょう。(P98)

熟練の差

○民主主義は、導入されている国によってその性質は大きく違う。ヨーロッパの民主主義は、古代ギリシャ時代からあらゆる試行錯誤が繰り返され、現在のフォーマットに至っている。日本は 150 年ほど前に導入し、加えて島国として独特の気質を育んできた。日本の民主主義を踏まえて政治家の発言や人々の動向を見ていこうと意識しているが、方向性の定まらない中途半端さに対する違和感は胸中に蟠っています。(P103)

「疑念」と「狡さ」へのリスペクト

○感染症を防ぐのは想像力。今の日本人は想像力不足。あらゆる可能性への推測や想像力(懐疑性)にこそ、私たちが生き残ることができるかがかかっている、というわけです。(P104)

侵略の脅威とイタリア料理

○「地球に生きていれば起こりうること」として何事も受け止め続けてきたイタリア人が、今回のパンデミックにこれから先どう対応していくのか、長い目でじっくりと見ていきたいと思っています。(P110)

第3章 たちどまって考えたこと

「旅」を封じられて

人間としての機能を鍛えたい

○自粛期間は旅の代わりに、今まで以上に本を読んだり映画を見たり、考え事をするに時間を費やすことで、それなりの充足感を得られています。加えて、「自分の考えを自分の言葉で言語化する」という技がいつにも増して鍛えられていく。こんなことも、今みたいな状況でなければなかなかできないことだと思います。(P118)

「自家発電」のススメ

○人間にとって最終的に頼りになるのは、自分自身以外にありません。このパンデミックには、自分を遅くする、いいきっかけを与えてくれるそんなポジティブな側面もあるのではないのでしょうか。(P122)

息子デルスと名作映画を見直す

○自宅に居ながら様々なコンテンツ(若い頃に観た映画を再度観る)を楽しめるのも、現代のパンデミックならではの。(P123)

『ゴッドファーザー』と『フラガール』

○日本映画「フラガール」やイギリス映画「リトル・ダンサー」のように、群れで生きる人間や社会の習性を冷静に観察することで、新たな発見や気づきに至り同時に自分のなかに封じ込められていたエネルギーを呼び覚ましてくれるような作品もあり、今のような時期の鑑賞に、特にお勧めです。(P130)

未来を予見し、警鐘を鳴らす文学

○第二次世界大戦による大ダメージから立ち上がろうとしていた時代に、素晴らしい文化の萌芽があったのは、映画界と並んで文学の世界です。(P131)

アマゾンでも漫画を描いた手塚治虫

○漫画の世界にも数々の才能が終戦後に登場しました。(P136)

○戦後という時代を毅然と生き抜いた表現者たちからのヒントをどんどん参考にしていくべきなのです。(P139)

自分の根幹を強くする時期

○このパンデミックの時期、耳の痛いことを避けず、面倒なことからも目を逸らさず、この時間をいかに過ごすかによって未来は変わってくる。一人ひとりがルネサンスを起こせるかの岐路に、今、私たちは立っているのかもしれませんが。

(P140)

○今という視点で見れば、寂しかったりつらかったりすることも、時間が経てばその人の強みに転化されるということは、誰にでも起きることではないでしょうか。(P142)

ガレリア・ウプパの日々

なぜ日本人の内なる"広辞苑"は薄いのか

○今の日本は、若者ばかりがもて囃され、お年寄りは表に出てくることを遠慮しているような印象を覚えます。(P147)

○テクノロジーの進化や外来文化が浸透していく勢いについていけないお年寄りの「足手まとい感」が、その時点で生まれてしまったのかもしれませんが。(P148)

○様々な感情による経験値や想像力によって構成された自らの「辞書」の情報量が少ないということは、先の見通しが立たないパンデミックのような問題が起きたときに、ぼんやりとした不安を自力で処理したり、巷に飛び交う情報を適切に疑ったり、ということができなくなるのでしょう。つまり、流言飛語や第三者の言葉にたやすく右往左往させられてしまう。

(P149)

○自分の頭で物事を考えられない人が大半になったときに、社会に発生する不穏な現象がどのようなものかは、ナチズムやファシズムを振り返れば容易に想像がつくでしょう。(P149)

○私の周りにいるイタリア人は、ワクチン接種により体内の免疫作りを選び、同じような考えから、内側に知力という抗体を作ることで、突破的な物事にも対応できるだけの思考力を鍛えることができるわけです。(P150)

松田聖子は「アイドル界のカエサル」

なぜ松田聖子のようなアイドルが今生まれないのか

一匹オオカミよりもグループ

○「ソロからグループへの変遷」は、アイドルのみならず、漫画の世界にも言えることです。(P155)

○昭和のあの頃、単独アイドルや一匹オオカミが受け入れられていたのは、戦後の日本社会に満ちていた熱くエネルギーな復興力が、まだ生きていた時代だったのかもしれませんが。(P156)

「恥辱」は最良の笑いのネタ

○パンデミックのなかなど、疲れた心に笑いは必要です。最良の笑いのネタは「恥辱」ではないでしょうか。「リコーダータイタニック」で検索すると直ぐに出てくる動画は、お勧めです。アップされてから相当長く世に出回っているのですが、見ると死ぬほど笑い転げます。これはニュージーランド人の動画で、「街を見下す高台」「波止場」「キャンドルライトに照らされた食卓」など、様々な美しいロケーションでドラマティックなポーズを決め、リコーダーでものすごく下手な「タイタニック」のテーマ曲を演奏するものです。(P159)

ゴールが決まっているコンテンツ事情

○メディアが作り出すコンテンツから知的触発を受け、そこから視野が広がって、何か考えさせられるような時代というのが、かつてはたしかにありました。(P163)

○凄まじいダメージを受けた人々の精神には諦感と開き直りが生まれます。そしてその先で、人生は決して自分の思った通りにはならないという事実や、物事のゴールは必ずしも決まっていなかった真理に気づかされ、それが革新的な思想だったり、形式に囚われない表現の自由を生み出すパワーに転換されていくのです。(P165)

人生は思い通りにならない

○無難な既成概念にすがり、まわりと比較をし、自分の思い通りにならないことに腹を立てるのも人間というメンタルをもった生き物の特性です。最初から人生とは思い通りにならないものであり、どんな顛末だってあり得ると理解していれば、もっと楽にいけると思うんです。(P169)

第4章 パンデミックと日本の事情

日本語の飛沫リスク

○会話時の声の大小、言葉の破裂音の多少、スキンシップが密な文化と日本の互いに距離を取り合う文化では、今回のパンデミックでの感染者数の大差は当然ではないだろうか。決して「ジャパンミラクル」と言われたような「日本の感染予防対策が成功している」を意味しないのではないだろうか。(P177)

日本美術の「疫病」と民主主義

○天災大国の日本では、実は疫病に対してもむやみに争うものでない、という感覚が、人々の意識の奥底にあるのではないか。(P178)

○「民間にこうした風俗が色濃く残っている日本」という視点で政府による一連の対策を見ていると、無理に西洋式の民主主義の考え方やアプローチを取り入れて、自分たちをそこに押し込めたあげくに戸惑い、素早く行動ができなくなっている様にも思えます。実は、私たちは今、自分たちの等身大のあり方を見直すための時間を与えられているのではないのでしょうか。(P180)

民主主義は参加することである

○「日本人は指示を待っている」との指摘があります。しかし、その待ちの姿勢では民主主義は成立しません。たとえ不勉強な意見でも発言することは必要です。決して「わかってもいなくせに、口を出すな」というような反応は、民主主義の仕組みを理解していれば、本来出てきようもないものです。(P181)

西洋化の歪みと「犬かき」

○日本人の「他国に褒めてほしい」という気持ちは、自信のなさの裏返しとも捉えられます。西洋化を選んだ国の一つである日本は、19世紀からの多国間貿易による市場の世界化が、政治の世界化につながる「過程」の只中にあるのかもしれませんが。(P185)

暴かれた「シークレットブーツ」

○今回のパンデミックによって、日本が明治時代から今までこっそりと履き続けてきた「列国」という名の「シークレットブーツ」の秘密が、暴かれつつあるのかもしれませんが。(P187)

「日本モデル」は空虚に響く

○2020年5月25日の日本政府の緊急事態宣言解除の記者会見時、政府の会見に失望してしまういちばんの理由は、情報に対する透明性のなさです。イタリアはじめヨーロッパ各国は、諸情報を公表しています。(P188)

○日本では、人々に自由な理念や考え方を育ませるための疑念や批判的精神が根付いていないのです。というよりも、根付かせたくないのかもしれませんが。こういう現状を見るに、日本はいまだに明治維新以降の試行錯誤の最中なのかなと、感じてしまうわけです。(P190)

森の精霊と卑弥呼

○日本の歴史は要するに、天皇と天皇を守る政権という二重構造になっているわけです。だからこそ、首相とは天皇を守るために表に立つ存在のため、多少の失言や失策があっても支持すべき、と考える人が一定数発生する。シャーマニズムが馴染む人々の社会構造と、西洋式民主主義の構造による解釈への軋轢が、妙な違和感の原因となっているのかもしれませんが。(P192)

SNS 上に見る凶暴な言葉の刃

○日本のような世間体の戒律が厳しく、空気を読む必然性が高い国だと、普段言いたいことをなかなか言語化できない。お酒を飲まないと言えないような環境にあるからこそ、特に日本は SNS の使い勝手がほかの国々とやや違っているように感じます。(P193)

○日本が西洋化する前までは、すべてを言葉に置き換えるわけではない日本人の精神性に見合った、それなりに柔和な社会環境があったはずだと思います。しかし、近代になって「誰でも自由に思ったことを発言するのがデモクラシー」という西洋式習慣が推奨されるようになった一方で、肝心の日本人がいまだに言語のもつ凶暴性を扱い慣れていない。そんな日本人の性質が、頻繁に起こるネット上の炎上表れているような気がしてなりません。(P194)

「漫画家のくせに」

○「疫病が発生した際にはウィルスの専門家の意見だけをあてにすればいい」といった矮小な考え方に囚われていたら、問題の解決策は永遠に生み出されないでしょう。ここでもやはり日本人の、言語化や思想の自由というものに対する不慣れさが露見しているように思えてなりません。(P196)

異質な人を排除する脆弱性

○日本文化の大家だったドナルド・キーン氏が日本国籍を取った理由の一つが、民族的先入観を払拭することでした。日本への批判を口にすると「アメリカ人に言われたくない」と叩く人が出てくるのでした。自分たちにとって異質な者に「攻撃」という形で反応をしがちなのは、島国という「群れ」の社会性をもつこの国の特徴です。(P197)

○新しい考えや価値観を受け入れるには、それだけ大きな負荷がかかります。一人の異質な人間がいたなら、理解を試みるより、排除するのが手っ取り早い。でもその行為が、組織そのものの体幹を痩せ衰えさせてしまうことになりかねない。(P199)

「失敗したくない」という病

○「失敗したくない」というメンタリティーは現代の日本人が抱える大きな病ではないでしょうか。実際、コロナ対策で日本政府が急に方針を変えたり、何かと右往左往している姿を見ていたりしても、失敗したくない、つまり責任を取らなさいいけない状況をとにかく回避しようとしている気がしてなりません。(P200)

○列国と肩を並べることに気負う以前の日本は(つまり江戸時代)、失敗や挫折や型破りであることが逆に、社会にとっての栄養となっていたように思えるのです。(P204)

戒律としての世間体

○緊急事態宣言下で商業施設の自粛が決まったとき、それでも営業を続ける店はその名前を公表する、というのが行政処分の限界だったようです。しかし、「名前を公表しますよ」というのはつまり「世間の目に晒しますよ」という罰則です。しかし、自治体が事業者に言える唯一のことが「世間から制裁を下されなさい」というのは、あまりにちぐはぐです。しかし日本の場合は、自粛を促すプレッシャーとして、往々にして機能する言わば「世間体の戒律」です。(P205)

○これが作用するのは新型コロナだけでなく、教育現場のいじめの問題における親子の関係性にも現れてきています。(P206)

リモートとエッセンシャルな労働

○新型コロナのおかげと言うべきか、特に「リモートワーク」が普及した。(P208)

○自粛期間中、よく聞くようになった言葉が「エッセンシャルワーカー」で、その意味するところに違和感を感じます。人間は、生理的な部分だけでなくメンタルも備わった生き物だからです。(P209)

「いないように生きていきたい」

○日本は、理解するのにエネルギーを要するような異質性は基本的にいらぬし、排除したい。そういうメンタリティーでありながら、「特異性をメリットとして受け入れる」西洋式政治システムで人々を統治しようとする矛盾。この体制が、そのうち独特な日本仕様の安定を生み、調和をなしていくのかどうか、直ぐには分かりそうもない気がする。(P213)

第5章 また歩く、その日のために

日本を見る、日本人を知る

○パンデミックという地球レベルでの人類における危機的現象と、どう折り合いをつけていくべきか。試行錯誤をいまだに続けている世界ですが、日本や日本人に相応しい対応がどういふものか、それを模索するうえでも、私たちはまず自分自身についてももっと知る必要があると思うのです。(P217)

○日本はもしかすると、成熟すること自体に興味がない国なのかもしれませんが…。だとしても、世界的な先進国の基準に合わせたいという必要があるのなら、過去の失敗も欠点も反省点も踏まえたうえで、文化人類学的な視点も借りながら客観的に見直す目を、もっと養ってもいいような気がします。(P219)

○例えば、「アベノマスク」や「Go to トラベル」に費やされる費用など、道理はわかっても、なんだか納得のいかない政策や提案が実施されました。その納得のいかなさの要因を、ネットやテレビで誰かが発信している言葉ではなく、自分の考えのなかから見つけてはどうでしょうか。それ次第でパンデミック後の私たちの生活、社会の変化の質は大きく変わってくるはずですよ。(P220)

裸足になろう

○日本とは違う土壌や歴史で形成されてきた西洋式の社会から学ぶことは多く、そこに気がついた明治の人たちが行った改革は画期的でした。ですが、受け入れられる部分と馴染まない部分があることへの考慮もそろそろ必要です。随分と時間が経ちましたが、違和感を覚えれば何がその要因なのか、体質に合っていない部分を見つけて考え直し、メンテナンスをしなければなりません。(P221)

「決めつける安堵」という呪縛

○日本人が早急な決め付けをしたがるのは、おそらく「この人は理解できる範疇にある人物だ」という確信に落ち着かないと、不安になるからです。いずれにしても、現代の日本人は何事に対しても「熟考」を避けているように感じます。(P224)

○日本では、振り込め詐欺のような、海外ではあり得ない「信じ込ませ型」の事件がいまだにボクメツされていません。日本人はやはり、猜疑心という想像力をあまり活性化しつけない国民なのでしょう。(P225)

パンデミックの副作用を知る

○生活苦や失業など、パンデミック下では不安になる要素には事欠きません。だからこそ人々のなかには、「うねりが起きれば便乗したい」というエネルギーが充満しています。何か一つきっかけがあれば人は群れとなり、暴動やクーデターのスイッチが入りやすくなるのです。(P227)

○人間の疫病の歴史をたどると、「群れになりたがる欲求」「生き延びようと思う強い意志」「排除したい衝動」が人々の内に発芽しやすくなるのがわかります。それはパンデミックの副作用のようなものなのでしょう。(P228)

○この先もパンデミックの副作用が集団でも個人レベルでも起きることがあるかもしれません。そんなときにこそ、とにかくいったんたちどまり、深呼吸をして、湧き立つ感情から自分を一度引き剥がすべきだと思います。(P229)

不安とどう向き合うか

○不安こそ人類にとって普遍的なウイルスだと言っているのかもしれませんが。日本人は不安が溜まっても、イタリア人と違い、言語化が不得意だし、空気は読まなきゃならないしで、ストレスが一向に排除されない。お酒の力を借りることで、世間体の戒律から逃れ、会社や上司や家族への愚痴もゆるされますが、そうでもしなければ不安というウイルスに心身を蝕まれてしまうことでしょう。(P231)

コロナ時代の海外旅行

○海外旅行に限りませんが、何かのきっかけで普段隠れていたものがスルッと暴かれてしまう。まるで今回のパンデミックと同じ現象ですが、だからといって格好悪い自分、失敗した自分を経験することを避けたままだと、人間の精神はどんどん脆弱化していくことになるでしょう。実は自分という存在は、考えているよりずっとかっこ悪く、恥ずかしい生き物なのかもしれません。それでも本来は、そんな時分と向き合い、うまく付き合っていくべきなのです。(P234)

「デジタル脳」の頼りなさ

○メディアから得る情報は、自分の知りたい「いいところ」だけ抽出できます。対して経験から得られる情報は、時に苦悩や失敗や屈辱感といった、苦悩がもたらすものも含まれます。だからこそ、発する言葉や行動にも、独特な彩りや深みが生まれるのです。(P236)

○テクノロジーの進化に飲み込まれることは、時代の流れとして抗えないものだと思います。しかしこうした傾向も、数々の文明がそうであったように、どこかでまた限界点を迎えることになるのではないかと。人間という生き物は、時間の経過とともに賢くなる生き物というわけではない、ということが見えてきます。(P237)

1 お金と想像力

○もしコロナ後に一文無しになったらどうするか、という話を夫とすることがあります。このようなシミュレーションは、安泰な暮らしのなかでも時々しておいたほうがいいのかもありません。(P239)

○パンデミックという自由が拘束される状態のなか、目の前は壁でも後ろを見れば、どこへでも行ける広い空間が広がっている場合もある。そしてそれを教えてくれるのはほかでもない、自らの想像力そのものなのです。(P240)

「もう一人の自分」とオーケストラ

○個人で生きる強さを持ち、自分なりの修練を経て、自分の責任を自分で処理する能力をもった人たちが、こうしたオーケストラ的な群れとして集まることは、民主主義に置き換えても理想的な形と言えるのではないのでしょうか。果たして日本という国には、こうしたオーケストラ的な民主主義がうまく馴染むことができるのか。(P241)

○いつまでも個人としての自由や判断を抑えて、群れに身を委ねたまま生活していれば、たちまちそこにいる全員が感染し、死をもたらすことにもなりかねない新型コロナウイルスの蔓延。それは、自分たち人間の習性や性質、世界のあり方、そして未来へのビジョンなど、今までなら深く考えもしなかったような、強く生き抜いていくためのあらゆることを我々に問いかけている気がしています。(P242)

おわりに

○疫病に命を脅かされるという事態は、人類にとって、今回が初めて起こったことではないわけです。14世紀のペストや20世紀のスペイン風邪など。(P243)

○この後、ルネサンスを興せるか、ナチズムやファシズムの台頭を許すのか、私たちは今こそしっかりと向き合うことを求められているのです。(P244)

○もとより私たち人類は、この地球から選ばれた、特別な生き物というわけでも何でもありません。私たちが今ここでちどまった意味とは、パンデミックという状況下でヒトという社会性をもった生き物がそもそも何なのか、危機が自分たちの社会に迫ったとき、どのような反応をする生き物なのか、今までと違う角度から見直すことにあるのではないのでしょうか。(P244)

○人類こそ地球にとって温暖化や環境破壊といったダメージをもたらす、ウイルスみたいな性質も帯びている。(P245)

○社会という群れのなかでなければ生きられず、知恵の発達した生き物としての傲りで膨れ上がってきた人類。パンデミックは、そんな我々にいったんちどまって学習する機会を与えてくれたのだと、私は捉えています。(P245)

以上